



# 現場から見た乳牛の産次を 伸ばす飼養管理のポイント

えのき だに  
榎谷  
まさ ぶみ  
雅文

最近酪農場の大型化が進み、以前は100頭飼養していた大きな酪農場であったのが、今では決して「大きな」と言う表現は使われないようになってしまいました。酪農場は大きくなっているにもかかわらず、その農場での乳牛の出入りは（廃牛と導入牛）それ以上に多くなっています。そのため何年経ても農場の飼養頭数は増えず、かえって減っている酪農場も見られます。どこに問題があるのでしょうか？ 今回は導入直後（自家育成含む）の初産牛に的を絞って、初産牛から廃用にしないためのポイントを書きたいと思います。

## 新婚時代から妊娠、出産 そして

恋をして恋愛して結婚する。その後の新生活はいかが？ 夢に描いていた現実とはあまりにも違い、配偶者（元恋人）に失望してしまう。果ては「成田離婚」なる言葉も生まれました。何故ですか？ 今までは相手の良い部分しか見えなかったのが、常に一緒にいると嫌な部分も見えてきます。今まで育ってきた生活習慣とは相手が異なり、新生活生活上トラブルの元と成ることも多くあります。結婚を機に夫の仕事先に転居するかもしれませんが、口うるさい姑がいるかもしれません。両親同居であれば、新婦のストレスは更

に大きなものになるでしょう。今まで全く他人であった人と生活を始める訳ですから。

その後無事妊娠しました。今度は初産（一人の場合は「ういざん」という）に対する準備です。出産予定近くなると、実家に帰りお産の準備をします。何故？ 処が2人目、3人目となると実家に帰ることよりも、母親（おばあちゃん）を自分の家に呼び寄せます。なぜ？

乳牛の事を考える前に、再度自分の恋愛時代、新婚時代、妊娠、出産を頭に思い浮かべながら、牛の世界の話に入りましょう。

「キーンワード」は  
「慣れ 慣らし」

乳牛の場合新婚とは行きませんが、すでに妊娠をして嫁ぎます。今流行りの「できちゃった結婚」かもしれません。妊娠は実家の方で済ませますが、出産は嫁ぎ先の方で行います。人の場合、妊娠は嫁ぎ先で行いますが、初産の出産は実家に戻ります。何故でしょう？ その方が新婦にとって都合が良いからです。今まで育ってきた生活環境があり、わがままを言える母親がいて初めての役割に挑めます。出産育児に対する精神的、肉体的援助をしてくれる人がそばに常にいてくれるからです。

乳牛の場合は、妊娠は実家の方で済ませますが、出産は嫁ぎ先の方で行います。まさか人のように実家にかえって出産とは行きません。それではその出産に対して精神的、肉体的援助をしてくれる人がいるのでしょうか？ この部分が多岐な問題点なのです。

出産予定2ヶ月前には嫁ぎ先に

移動していますか？ 何かの都合で1ヶ月前に移動していませんか？ 出産直前ではありませんか？ 牛も人も生活環境の違いに慣れるだけの時間を必要とします。出産直前では慣れる時間が短すぎます。甘い新婚生活を過ごす時間が必要なのです。

寒い北海道からいきなり暑い環境の場所に移動していませんか？ 環境の変化はいた仕方が無いとしても、扇風機も無い場所で西日のあたる場所に(部屋)引越していませんか。屋根が低くアンモニア臭が漂っていませんか。換気はどうですか？ 水は充分飲めますか。人間はクーラーで空調の効いた場所ので出産前を過ごしますが、牛のこと考えた事がありますか？ 出産前の初産の人を扱うように、環境を考えたことありますか？ 暑い場所です。換気も悪ければ産後病気になるって当然ではありませんか？ 病気にはならなくとも乳量が低くありませんか(暑熱対策に) 関しての記事は、本誌・二〇〇〇年五・六月号を参考にして下さい。

